



「おたふく物語」

山本 周五郎著

表題が気に入って本を手にしました。「妹の縁談」「湯治」「おたふく」の三部作と「凍てのあと」「おさん」あわせて五篇からなる。江戸の街、長屋住まいの人々の暮らしぶりが日常会話のやりとりから見えてくる。しず女は長唄の出稽古を生業とし、妹とふた親との暮らしを支えている。不器量だから嫁に行くことはないと心に決めていた様子。しず女の言葉で表せば「あたしは、のろでとんまなことばかり、背は低く、肥っていて、自分がおたふくだって事知ってるわ」。人の気をそらさず、時にはトンチンカンなことを織り交ぜて話す。底抜けに明るく元気な性格で弟子たちを、出先の家族を巻き込んでいく気質は誰からも好ましく思われています。出入り先の飾り職人に想いをよせて、その人が誂えた帯留めや飾り櫛を、人に頼んで密かに買い求めたりもする。男物のよそ行きを誂えて帯から足袋まで小物も買いそろえ、それを眺めながらあれやこれやと物想いにふけて楽しんでる。結局周りの人の世話で所帯を持ち自分の想いをとげてしまう。かわいくて、力強く、しず女の行動と言葉に心熱くなり、しず女のイメージがしだいに美しい器量よしに変わってしまいました。又、しず女が突拍子もないときに使う比喻や洒落には言葉遊びの楽しさがあります。「おたふく」の最後には思わず涙ぐんで笑ってしまいました。日本人の「粹」の文化の原点は、江戸時代、職人氣質や庶民の暮らしを整える事にあつたのだろうか？

S
W



ハルキ文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞